

小論文作成過程における図書館利用について： 初年次情報リテラシー科目の学生記述アンケートから

川崎 千加

1. はじめに

近年、初年次教育や情報リテラシー科目に大学図書館が参画するケースが増えてきている。また、ラーニング・コモンズの設置など図書館による学習支援機能への注目が高まっている。しかし、その内容は授業内の一部である情報探索部分を図書館員が受け持つものであったり、ラーニング・コモンズでの日常的な学習相談はTAに委ねられている場合が多い。その背景には大学全体の取り組みとして、学生の自発的な学習を必要とする授業が十分展開されていないことや、図書館の人的資源の不足（人数、専門性の維持の困難さなど）、学生側の図書館利用に関するイメージの乏しさなどがあるのではないだろうか。

初年次に限らず何らかの課題を解決しようとするとき、人は何らかの情報を求める。その支援をするのが図書館であるとされているが、初年次の学生は論文作成といった課題解決において図書館の活用を十分に行っているだろうか？ 筆者は初年次学生が小論文作成過程でどのような点に困難を感じ、不安になり、その課題を乗り越えているのかについて、初年次必修の情報リテラシー科目履修学生の記述式アンケートから把握した（小松 & 川崎, 2012）。本稿では、その中から特に図書館に関する記述部分を取り上げ、初年次学生が小論文作成過程においてどのように図書館を活用しているかを把握し、図書館の学習支援として求められることが何かについて検討する。

2. 大阪女学院における初年次情報リテラシー科目の概要

大阪女学院大学では、初年次必修科目の一つに、論文作成のスキルを学ぶ情報リテラシー科目が設けられている。短大では「研究調査法」、大学では「情報の理解と活用」として、ほぼ同様のコンテンツ内容で半期

15 週全体を通じて、4500～6000 字の APA スタイル¹による小論文を最終課題として提出することになっている。授業では、各自が自由に設定したテーマに基づき、事前調査、情報検索、論文アウトラインの作成、批判的読解、情報の記録と組織化、執筆とプレゼンテーションまでの技法を毎週の課題提出の中で身につけて行く。

小論文のテーマは固定せず、個々の学生の興味や関心に応じて設定している。当科目で仕上げる論文は、いわば研究の基礎となる先行研究にあたる部分であり、課題を通して APA スタイルを身につけつつ、最終論文では各テーマに応じた文献調査からその内容の解釈と分析を通し、新たな知見や提案を行うことを求めている。ここで扱う文献は図書、雑誌、新聞、インターネットまで多岐にわたり、図書館がその重要な情報資源であることを伝えている。そのため、授業の第 2 週、第 3 週の 2 回にわたり、図書館での演習を行っている。

なお、当科目は 1 クラス 20～30 名程度の集合学習を行うと同時に、教材配布や課題提出、小テストなどすべてを LMS (Learning Management System) を利用したブレンディッド型授業²となっている。また、当該科目は 2012 年度から 1 年生全員に配布された iPad を使用している。

3. 調査の概要

この科目では一般の授業評価アンケートとは別に、小論文作成過程を 10 のステップに分けて振り返り、苦心したことなどを記述で答えるアンケートを実施している。各週の授業スケジュールはこのステップに沿って運営され、各ステップをこなすことで最終論文の仕上げにつながるものとなっている。各ステップとは「Step 1 題材選び」「Step 2 事前調査」「Step 3 仮アウトライン作成」「Step 4 関連文献の調査」「Step 5 利用文献の入手」「Step 6 情報カードの作成」「Step 7 最終アウトラインの作成」「Step 8 執筆と校正」「Step 9 出典の表示」「Step 10 仕

¹ APA とは ‘The American Psychological Association’ (米国心理学会)の頭文字。
‘APA スタイル’ というのは、社会科学の分野で論文を書く人々にとって標準的なフォーマットである。

² ここで ‘ブレンディッド型授業’ といっているのは、‘ブレンド型授業’ ともいわれ、e ラーニングの強みと教室授業の強みを組み合わせた授業形態を指す。

上げ」の10段階である。さらにステップにとらわれず、作成過程全体へのコメントを求める、「論文作成の各ステップをふりかえり、その時の状況や苦心したことを述べてください」という設問を設けている（小松 & 川崎, 2012, pp. 35-36）。

本稿で用いるデータは、2008年度から2011年度前期までの「研究調査法」「情報の理解と活用」の履修者1,121人の内、616人³の上記アンケートの記述文である。記述文のデータ分析には、フリーウェアのデータマイニングのためのソフトである khcoder を用いた。Khcoder で抽出された総抽出語数は219,727語（大学99,222語、短大120,979語）、語彙数は5,981語（大学3,930語、短大4,471語）であった。そのうち、「図書館」の出現数は679回（大学292回、短大389回）で、「図書館」に関するコメントをした学生数は170人であった。表1に示すようにこれはすべての抽出語の内、11番目に多い出現数であった⁴。

表1 抽出語出現数 上位20

順位	抽出語	出現数	順位	抽出語	出現数
1	書く	2242	11	図書館	679
2	思う	1781	12	難しい	629
3	本（図書）	1650	13	苦労	621
4	論文	1475	14	たくさん	529
5	自分	1253	15	カード	499
6	アウトライン	971	16	文献	489
7	大変	806	17	資料	482
8	情報	784	18	時間	463
9	読む	756	19	先生	461
10	調べる	690	20	テーマ	458

³ この間の履修者は、「情報の理解と活用」が506人で「研究調査法」が615人で総数1,121人である。その内、論文を書き上げアンケートまで提出に至った件数である「情報の理解と活用」285件、「研究調査法」331件を対象とした（小松 & 川崎, 2012, p.36）。

⁴ 「図書館」の出現数は大学・短大共に6番目に位置した（小松 & 川崎, 2012, p.48）。

次章では、この「図書館」に関連して記述されたコメントを中心に、小論文作成過程において、学生がどのように図書館を使ったかについて検証していく。

4. 調査結果

4-1. 図書館と共起する単語

まず、「図書館」に関する記述 679 件の内、本学図書館に関する記述と特定できたものは 176 件であり、「学校の図書館」「大学の図書館」「女学院図書館」として記述されたものである。表 2 にある「学校」は「大学」と置き換えるべきもので、初年次学生にとっては、まだ大学図書館は「学校の」図書館という意識が強いのか、この語が多用されていた。公共図書館の利用は「地元の」、「近くの」図書館という表現が多く、市立 3 件、府立 2 件、公共 1 件、公立 1 件、国会図書館 1 件などの記述も見られた。大学以外の図書館を利用した記述は 73 件が確認できた。その他の 679 件中 430 件は「図書館」とだけの記述であった。

表 2 で「図書館」と強く関連して記述された語について見ると、「本」「借りる」「探す」「利用」「行く」などが高い共起性を示している。ここでは図書館は「本」を「借りる」場であり、「本」を「探す」ために「行く」という「利用」であることが分かる。更に、「文献」や「資料」を「入手」するために利用していることや、「読む」よりも「調べる」が共起としては高くなっているように、調査のために利用していることも把握できる。これは、各 Step のどこで図書館を使っているかにも関連するものである。次節では、10 の Step の内、「図書館」に関する記述があったものから、小論文作成過程での図書館利用について検討する

表2 図書館と共起を示す語 上位 20

	抽出語	品詞	全体	共起	確率差
1	本	名詞 C	563 (0.114)	111 (0.422)	0.3076
2	学校	名詞	64 (0.013)	48 (0.183)	0.1695
3	利用	サ変名詞	85 (0.017)	49 (0.186)	0.169
4	行く	動詞	50 (0.010)	37 (0.141)	0.1305
5	借りる	動詞	97 (0.020)	37 (0.141)	0.121
6	探す	動詞	167 (0.034)	38 (0.144)	0.1105
7	女学院	名詞	34 (0.007)	23 (0.087)	0.0805
8	文献	名詞	200 (0.041)	31 (0.118)	0.0772
9	入手	サ変名詞	43 (0.009)	21 (0.080)	0.0711
10	主	形容動詞	27 (0.005)	17 (0.065)	0.0591
11	調べる	動詞	265 (0.054)	29 (0.110)	0.0564
12	資料	名詞	202 (0.041)	24 (0.091)	0.0502
13	雑誌	名詞	92 (0.019)	18 (0.068)	0.0497
14	地元	名詞	13 (0.003)	13 (0.049)	0.0468
15	大学	名詞	21 (0.004)	13 (0.049)	0.0452
16	読む	動詞	304 (0.062)	26 (0.099)	0.0371
17	インターネット	名詞	64 (0.013)	12 (0.046)	0.0326
18	関連	サ変名詞	92 (0.019)	13 (0.049)	0.0307
19	図書	名詞	82 (0.017)	12 (0.046)	0.029
20	見つかる	動詞	57 (0.012)	10 (0.038)	0.0264

4.2. Step 別に見る図書館利用

小論文作成過程の 10 の Step の中で、図書館の記述があった件数は表 3 の通りである。

特に「図書館」に関する記述が多く見られたのは、「Step2 事前調査」、「Step 4 関連文献の調査」、「Step 5 利用文献の入手」での記述であった。これらは、それぞれ何らかの調査が行われる段階で特に多く図書館を利用しているといえる。次節からは、図書館に関連した記述について Step 毎に把握していく。

表3 設問毎の「図書館」の出現数

設 問	件 数
step1	19
step2	122
step3	3
step4	128
step5	369
step6	6
step7	1
step8	1
step9	2
step10	3
自由記述	25

4.2.1. 「Step 1 題材選び」の図書館利用

題材選びは興味のあることから論文テーマを決める段階である。ここではテーマを選ぶ際に図書館へ行き、「たまたま目に入ったもの」をテーマとしたことや、題材選びのために図書館の本を借りたり、本棚を眺めた中から面白そうだと思ってテーマを決めたことなどが述べられた。この段階では図書館の蔵書が興味を引き出したり、「図書館へ行くとあまりにも範囲が広くて、そこで悩みました」というように、視点を絞る必要性に気付くことが確認できた。また、「友だちと被ると図書館の本が取り合いになるので、友達と情報交換をしながら題材を選んだ」というように、資料が多くあるかどうかもテーマを選ぶ時に影響を与えたコメントが19件中10件あり、題材を選ぶ段階で図書館の蔵書が不安なく論文に臨めるかどうかの条件となることが伺える。

4.2.2. 「Step 2 事前調査」の図書館利用

ここでの「図書館」に触れたコメントは122件で、10のStepの中で3番目に多い出現数となった。「Step2 事前調査」は第3週の授業で図書館での演習として、各自の論文テーマについて概要を調べ、テーマに関するキーワード・リストを作成することを課題としている。これはテーマに関する基本的な用語を知り、これまでの議論やそのテーマに関する

また、第2週、第3週の授業で図書館での演習を受けたことで、「あまり行かなかった図書館に頻繁に行くようになりました」、「図書館のイメージとかを使いまくりました」「ここらへんから図書館へ本を借りに行ったりし、図書館へ行く機会が増えた」、「図書館実習がなかったら今の論文のように書けなかったと思う」、「自分の図書館に関する知らない世界を発見できました。図書館の利用の仕方などを学べてよかった」といったコメントも9件見られた。論文にはインターネットは特定のものを除いて基本的に使えないこと、本や雑誌記事を読まないと書けないことなどを伝え、実際に図書館に行き本を探したり、キーワードを探すことで、図書館の使い方やレファレンスブックの使い方が分かり、図書館を使うことへの動機付けになっていると言える。

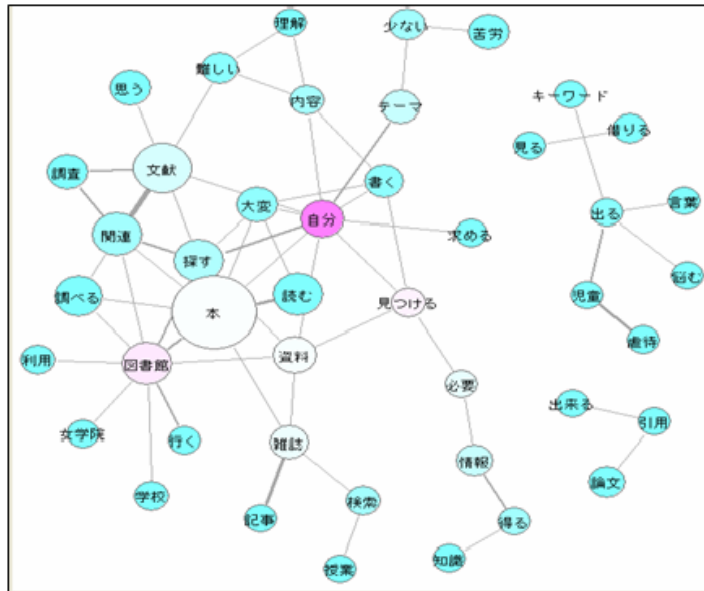
次の、「Step 3 仮アウトライン作成」では、サンプルを参考にAPAスタイルによる仮アウトラインを作成する。論文の中心的論点を何処に置くか、テーマに対する視点を絞り込み、アウトラインの形にする課題となる。ここでは、図書館に関する記述は3件見られた。「図書館で調べたことを元に」仮アウトラインを作成したことや、アウトライン作成のヒントを得るために図書館に行き本を借りたといったコメントであった。

4.2.3. 「Step 4 関連文献の調査」の図書館利用

図書館の記述が128件と2番目に多く見られたが、ここでは、第3週で集めたテーマに関するキーワード等を用いて関連文献を調査し、見つけた文献の情報をAPAスタイルで記録する段階となる。関連文献の調査は、第4週でOPAC検索、第5週で二次資料の紹介としてNDL-OPAC、WebCat Plusの検索、第6週でCiNiiの検索を行う。

図2にあるように、ここでは「本」が中心に探されており、そのために図書館へ行って関連文献を探している。仮アウトラインを作成し、そのアウトラインの項目について調べられる資料を探すため、事前調査の段階より求める情報は具体的になり、検索のためのキーワードも得た後の探索がここで行われる。ここではインターネットから情報を探したというコメントは4件と減少し、事前調査とは異なりOPACを活用したことが記述されたのは17件であった。

図 2 「Step 4 関連文献の調査」



苦労や少ない、難しいといったことばが出現しているのは、この段階で資料を探すことに苦労したこと、図書館での探索法が難しいと感じたことなどが述べられたものである。求めるものが「なかった」「少なかった」「見つけられなかった」といった報告は 14 件見られた。アンケート全体では、このような資料が無かったとするコメントが約 48%になり、蔵書数や蔵書構成が学生のニーズに十分対応できない状況があることが考えられた。一方で、学生の設定するテーマが本学には、当然無いようなテーマであること、学生がうまく資料を探せていない場合も多い。更に、見つけたものや学術雑誌論文では「難しくてわからない」ものであったりする場合もある。そのため、これらは本当に図書館に求めるものがなかったのか、本以外の雑誌や新聞を探したかどうかは不明である。

なお、苦労したときに「図書館の職員」に相談したことは 1 件見られたが、ほとんどの学生は司書に聞くことをしていない現状も浮かび上がる。

4.2.4. 「Step 5 利用文献の入手」の図書館利用

「Step 4 関連文献の調査」と入手はほぼ並行して進められる。図書館に関する記述の約 54%が利用文献の入手での記述で出現数は 368 件となった。図 3 では探していた「本」を図書館で「借りる」ことに重点が

館で本を借りたり、通ったとするコメントが6件抽出された。

これは Excel ファイルを使用し、文献情報の記録シートと引用文の記録シートを任意の文献リスト No でリンクさせ、引用に対する出典表示が可能なように引用ページなども記録するものとなっている。小論文ではこれらの引用文を活用し、出典表示をした上で自身の考えを述べることを求めている。初年次段階では引用や出典表示の意味を理解し、基本的な論文スタイルを身に付けることが重視されており、最低40枚の情報カード提出を課題としている。情報カードを作成する過程で書こうと思っていた内容に変更が生じたり、漠然としていたものが明確になるため、次の Step で最終アウトラインを作成することになる。

「Step 7 最終アウトラインの作成」では、基本的には仮アウトラインを発展させる形で、情報カードの内容から詳細で論理的な流れを意識したアウトラインの再構成を行う。そのため、ある程度資料を読み、仮アウトラインから問題意識も明確になった段階であり、再度より具体的に論文の流れが見えるアウトラインを作成する。ここでは、探索や読むといった行動ではなく、思考することが求められ図書館を使うことは結びついていない。そのため、図書館で見つけた本を参考にアウトラインを作成したとする1件のみのコメントであった。

「Step 8 執筆と校正」では、情報カードを活用しながら本文を書いていく段階で、図書館に関する記述は1件である。それは書き進めた段階で「証明材料が不十分だと気づき、国会図書館に行った」という記述である。最終アウトラインの作成は、情報カードの内容を点検する段階でもある。この時に、アウトラインで書こうと思っていることに対し、情報が不足しているために、更に情報カードを増やす＝資料を読む必要が生じてくる。この1件のコメントをした学生は、国会図書館に行って調べ、見つからず、再度訪れて「答えが載っている文献を見つけると書くのが楽しくなってきた」と記述している。書くために読み、思考する行動が中心となるが、書き進める上で図書館の文献が十分であるかどうかは大きな影響を与えるといえる。

「Step 9 出典の表示」の2件のコメントは、引用文献のリストを作成し、出典表示の最終確認をする段階である。ここでの図書館のコメントは、引用文献が少なすぎ、もっと図書館を活用すべきだったといっ

た反省となっていた。「Step 10 仕上げ」では3件の出現数であったが、いずれも全体を振り返った形で、図書館で本を借りて読み、書き上げたことが主として述べられていた。

最後の自由コメントは論文作成過程全体を振り返り、大変だったことや達成感を感じたことなどが述べられるところである。ここでの図書館に関する25件のコメントは、この科目を通して図書館を利用するようになったことが19件、図書館の使い方が分かったというものが6件あり、「生きてきた中で一番図書館を使った」といったコメントも見られた。これらのコメントでは、何らかの自身の関心のあるテーマについて、深く調べ、読み、考えた経験が語られていた。

5. 考察

本学学生に限らず、大学入学前までの図書館利用は決して豊かとは言えない。また、体系的な図書館利用教育を受けた経験をもつ学生はまだまだ少ないのが実態である⁵。そうした点からも、初年次情報リテラシー科目において、図書館の利用を推奨し自律的な学習を促進することが求められてきている。しかし、多くの大学では図書館の利用も含めた情報リテラシー科目では、図書館員がOPAC等の情報探索の演習を行ったり、図書館ガイダンスを盛り込む程度に終始している。

本学の情報リテラシー科目は必修科目であり、論文提出という課題があることで学生は図書館を使って情報を収集せざるを得ない状況を作っている。つまり図書館を利用する動機付けは、何らかの課題を解決するという目的がなければ難しい。更に、図書館の利用経験が乏しい初年次学生には、授業の中で図書館演習を持ち、具体的に利用方法を伝えることなどが必要であるといえる。

インターネットに頼りコピペする学生が問題になっているが、今回の記述内容からは学生は本を読む、そのために図書館を使う必要があることを意識していることが推察できた。特に、小論文作成過程の事前調査、

⁵当科目の期初アンケートでも大学入学までに図書館の利用指導を受けたという学生は55%程度である。また、司書課程学生104人へのアンケートでも、61%が何らかの図書館利用指導を受けたことがあるとしたものの、受けた時期については小学校44%、中学校16%、高校27%であり、大学での図書館利用に結びつくような指導を受けているとは言い難い状況である。

文献情報の探索、文献入手という前半部分での活発な図書館利用があった。反面、入手した資料を読んで情報カードを作成する段階（7週以降）は、主として読む、書く、考えるといった行動となる。この読んだり書いたり、考えたりする状況に図書館はほとんど関連していなかった。これは、PCの台数や友達との会話もしながら、というわけにはいかないこと等、本学図書館の空間や設備の問題もあることが推察できた。

また、初年次段階で4500～6000字の論文を書く過程のほぼ全般において、学生は多くの「不安」を抱える。そんな文字数が書けるのだろうかという不安、テーマが決まらないことや視点が絞りきれない焦り、書き上げられるか、これでできているのかといった不安等である（小松 & 川崎, 2012, pp. 44-45）。今回の図書館を巡る記述では、関連資料が図書館で見つからない、探し方が分からない、資料がないことへの不安が多く見られた。これは文献入手段階だけではなく、テーマを決める段階や事前調査段階、情報カードを作成する段階、また少ないながら執筆段階でも更に文献を求める記述が見られた。

探索が不十分なことも一つの要因と思われるが、図書館の蔵書構成や蔵書冊数が学生のニーズに対応できていないことも想定できた。本学学生の貸出冊数は全国でも高いレベルを維持しているものの、その数値は2005年以降低下傾向にある⁶。学生の読解力の低下に原因を求めることはできるが、予算の少なさから蔵書の新鮮さを保てていない実態もあるだろう。

資料がないことへの不安を補うのは司書の支援であると思うが、残念ながら今回の調査では司書に関する記述は3件に留まった。大学での情報リテラシー教育では教員との連携が重視されてきているが、本学の情報リテラシー科目ではLMS内のコンテンツから学生の学習状況、成績までも図書館員が把握できるようになっている。その意味では、学生個々の状況に応じた支援が行える体制になっている。しかし、学生の中に図書館員に聞くという意識はまだ希薄であり、近寄りがたい存在であ

⁶ 『2011年度 図書館報告』によれば、短大生の1人当たり貸出冊数は2007年度32冊から2011年度では23冊に、4大生では2007年度32冊が2011年度は21冊となっている。なお、2011年度全国の大学での1人当たり平均貸出冊数は8.7冊とされる（ICU, 2012）。

る可能性も示唆された。

6. 結論

「図書館」に関する 679 件の記述から、小論文作成過程の中で初年次学生がどのように図書館を活用しているかを把握した。その中で「図書館」の存在が情報や資料の入手という側面で大きな役割を果たしていたことが考察できた。課題解決のために、図書館での調査を早期に経験するリテラシー教育は、その後の大学での自律的な学びを促進するはずである。図書館の本棚でテーマを決める、関連する文献の入手や情報の収集、それぞれの段階で多くの学生が抱える「不安」を支援できる基盤は、図書館の豊かな蔵書である。そして、探し方が分かり、資料の使い方がわかること、適切な資料に辿り着くことへの支援を行うのは司書である。その司書には、「駆け込み寺」のような存在であることが求められるのではないだろうか。いつでも安心して相談できる司書の存在の重要性をあらためて指摘したい。そのためにも、司書が教育に積極的に参画すること、教員との連携を通してより多様なニーズに対応できる学習支援体制を構築することが必要であろう。

以上

引用文献

- 国際基督教大学図書館[ICU]. (2012). 貸出冊数 (総数・学生 1 人あたり). 図書館統計・データ. Retrieved January 9, 2013, from <http://www-lib.icu.ac.jp/LibraryData/index.htm>
- 小松泰信 & 川崎千加. (2012, 3. 1). 初年次教育における小論文作成過程の質的研究: 情報リテラシー教育に求められる学習資源と支援. 『大阪女学院大学紀要』, (5), 33-55.
- 大阪女学院大学・短期大学図書館. (2012, 5). 2011 年度図書館報告. 図書館データ. 大阪女学院図書館 Retrieved January 9, 2013, from http://www.wilmina.ac.jp/ojc/Library/data/lib_note

(大阪女学院大学・短期大学 特別専任講師)